

徳永直の創作と理論

—プロレタリア文学における労働者作家の大衆性—

わだ たかし

和田 崇

本論文は、プロレタリア作家徳永直について、1929年6月の「太陽のない街」（『戦旗』）の発表から、1937年12月に著者自らが『太陽のない街』絶版宣言をして国策文学に加担するまでの小説や評論を対象とし、プロレタリア文学運動において彼の作品が持つ意義やそこに内在する問題点を研究したものである。

第1章は、デビュー作『太陽のない街』の意義を考察する。第1節では、作品の題材と作者の関係、および徳永が所属した芸術団体ナップで展開された大衆化論との関係を探り、第2節では、ロシア文学の受容により獲得した創作方法の効果を探ることで、同作が持つ大衆性の要因を明らかにする。第3節では、同作がドイツ語に翻訳されて海外に伝播した過程を検証することで、日本の労働者作家の小説が当時のヨーロッパの読者に与えた影響を明らかにする。

第2章は、これまで批判的に評価されてきた徳永の文学理論を再検討し、その有効性と問題点を考察する。第1節では、彼が主張したプロレタリア大衆文学論を、同様の理論を提起した貴司山治との位相や大衆文学との相対関係の中で捉え、その意義を明らかにする。第2節では、論文「創作方法上の新転換」でナップの指導理論を批判した背景と、ナップ脱退後に彼独自のリアリズム論が形成されていく過程を検証する。第3節では、この時期に同じ題材で描かれた「島原女」と「女の産地」の2作品を比較することで、理論の変遷とその問題点を明らかにする。

第3章は、徳永の転向文学における社会批判のあり方を考察する。第1節では、積極的に評価できる作品として、当時の教育制度を庶民目線で批判した「八年制」を取り上げ、同作のアクチュアリティと批判の所在を明らかにする。第2節では、徳永の「転向」に対する考え方を整理した上で、彼の非転向の論理と労働賛美をした作品が、次第に国策へコミットしていく問題を検証する。第3節では、以上の考察を踏まえ、徳永の戦前の文学活動が、理論的な変遷を経て権力へ完全屈服したものの、その大衆性の残滓が微弱ながらも国策の矛盾を暴き出したことを示す。